# 幸せの草

マキコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの草

【Ｎコード】

Ｎ２４６５Ｆ

【作者名】

マキコ

【あらすじ】

幼い頃の思い出。それが、だらしなく生きていた佐伯の人生を大きく変える・・

## 第一話「夢の草」

「・・・あ！これだけ４つ、はっぱがついてる！」

「あ！これってね、「よつばのくろーばー」っていうんだよ。もってるとね、しあわせになれるの！」

「え！そうなの？でも、こんなのぐちゃぐちゃになっちゃうよ！」

「じゃあちょっとかして！」

パタン

「こうして本にはさめておいたらぐちゃぐちゃにならないよ。」

「わぁ～！！ありがとう！僕、たいせつにもってしあわせになるね！」

「うん！」

「ねえ、もし僕がおとなになってしあわせになったら・・・」

「うん？」

「けっこんしよ【ピピピピピピピピ】

「うひょぉい！！！」

うおっ。驚きのあまりめちゃくちゃ高い声でた。

俺は、目覚まし相手に本気で驚いてしまったことに自分で恥ずかしくなってきて、とっさに音を叩きとめた。

バシッッッ。

「あんた、いくら私が起こしても起きなかったくせに・・・」

バタバタと音を立てて母ちゃんが俺の部屋のドアを勢いよく開けた・・・ってオイ！

「か、お、お母様！ちょっと見んといてーや！！」

パンツ一丁の俺は布団を体中に巻きつけた。うーん、朝なのに見事に汗びっしょり。

「良いから早く降りてきな！朝ごはんもうみんな食べちゃったよ！」

「はいはい～・・・」

俺は軽くパジャマを羽織ると、階段を下りた。

「ぎゃひょえええええええええ！！！！」

さっきの俺の声に負けず劣らずアホな声が聞こえた。

「あああ、アイロン逝かれた！もうだめだぁ死ぬしかない！！」

朝から全力で叫んでいるのは、俺の妹、間宮空（まみやそら）。愛すべきアホ妹。

あ、俺の名前は　間宮　佐伯（さいき）。　あ、このへんはスルーで。。。

「もうやだーーーーお母さん強制かけたーいーーー」

「馬鹿いわないの！！！！あんたもう2ヶ月前にかけたでしょ！！」

母ちゃんがポンコツになったアイロンで空の頭を力の限り叩いた。

「いた熱ぃ～～～～～～～～～～～ン！！」

見るとアイロンが熱を取り戻していた。

「あああ！直った！お母様ありがとぉ～～～～ん！！」

ぁ、朝からアホなやり取り見てたら時間無くなった。やば。

俺は急いで食パンと牛乳をたいらげると、制服に着替えた。

「いってきぃまあああす！！！！」

中学のとき、母ちゃんに始めて買ってもらったボロボロのすにーかーをはいて家を飛び出した。

「ひっ　　ひゃっ　　ほょっっっ」

や、やばい。　パンと牛乳がコラボして舞い戻ってきちゃうよ。

俺は今、高校2年生。青春真っ只中。彼女いない暦＝年齢をまだ守っている。

キーンコーンカーンコーン・・・

学校までまだ６００Ｍぐらいなのに、もうチャイムが鳴ってしまっている。

「ふっはあああっははははッ」

意味も無く笑ってみた。誰か突っ込んでくれる人がいたら嬉しかった。

「なにわらってンの？・・・」

ん？希望どうり突っ込んでくれた・・・と思ったら、横から息も切らすことなく

福田　沙里南（さりな）　が走ってきた。

「ふ　き　きみもっ　遅刻ですかっ」

「猛ダッシュするからって余裕こいてたらちょっと失敗した」

淡々と喋りますねきみは。私は酸素が足りなくてあえいでるっていうのに。

「今　チャイム　鳴った　けどっ　だいじょいぶ」

ヤバイ・・・疲れのあまり日本語が・・

「まじで！！？やば、急がないと」

あれ？気づいてなかったんかい！　待って！おいていかないで！

と言っても、陸上部の沙里南はあっという間に見えなくなった。

ありえない！やっと学校が見えてきた。

## 第2話「愛のムチ」

沙里南に置いてけぼりにされた俺は、今、後一歩で学校の敷地内だというのに固まってしまいました。なぜかというと、赤ジャージ＆竹刀という古いファッションでしかめっ面をした餡焚苛修羅（あんたくかしゅら）先生が立っていたからです。

「くぉおおお～～～～らぅぁぃぉけぁ！！！！間宮～～～～～～～！！」

「せ、先生！僕は無実です！っていうか、福田さんもいま遅れてきたでしょう！！？」

「何いってんだ！そんな言い訳通用するか！男なら潔く背中を出せ！！！！」

ちょちょちょ、どういうことん？アイツは俺よりはるかに先に学校についていたはず・・・

「ま、まあまあ落ち着いて先生！！」

ちょ、お願いだから先生そんな恐い顔で竹刀を振り回さないで！

「せ　先生・・ちょっ」

ぬう・・・なかなか手ごわい。　・・・ん？もしかして、アレって・・・・

（ごめんねー　先、行かせて貰うよ）

口パクで話しかけてきたのは・・・沙里南ぁ！！！　沙里南は校門の裏に張り付いていた。

畜生・・・そうして俺が来るのを待ってやり過ごそうと言う腹だったのか。計算高いヤツめ！

沙里南はブラウンのポニーテールをほわほわと揺らして校舎の中に消えていった。

　バチーン！！！！

俺の背中には赤い跡が出来た。

ガラガラ・・・
「げっ。」
1時間目終わってるし！あの後、餡焚に力の限り叩かれた後、更に説教をされた。叩くだけじゃ物足りないってか！
「あらぁ～！Ｍｒ，ママヤ！遅かったわねえどないなすった？」
う。朝からテンション高すぎＭｓ，下田。後英語の先生なんだから喋り方統一せいな。
「ちょっと先生と相談してたもので」
・・シカトかよ！　泣いていい？
「あ、佐伯！朝はゴメンね～ん♪」
全く反省してない様子で沙里南が謝ってきたと言えるのでしょうか！（あれ？

沙里南とは親との付き合いもあって、保育園の頃から仲良く「させられて」いる。
特別凶暴と言うわけもなし、わがままでもなく、クラスやクラスメートの親たちからも好評だ。
俺も嫌いなわけではない。そのポニーテールとか、ブラウンの瞳とか。
何より陸上によって鍛えられたほどよい筋肉ほどよい贅肉。ただ・・・なんか。ねぇ？
「ははは。騙されるあんたもバカなの。」
沙里南の隣に座っているのは荒谷恵理子（あらやえりこ）。なんていうか、コイツは人の心を読めるエスパーだと確信している。
「そんなわけ無いでしょ。」
うぉ！ほらネ！　って沙里南と話してただけだった。俺は話題にもされないってか。悲しい。
「佐伯！おは～ん！！」
後ろから飛びついてきたのは・・・って重いわ！
「んぶごふッ」

後ろから飛びついてきた島谷大地（しまやだいち）に俺は一発エルボーを食らわせると、続いてラリアットを食らわせた。
「そんなにやらなくてもっ」
さらに４字固めしていると先生が来た。席に座らないとねっ。
・・・その前に大地の足のつま先を踏んでおいた。
「何で爪先を踏むんです？」
ごめんね八つ当たりで。

俺はその後の授業はほとんど集中できなかった。背中痛いって・・・
どんだけ力いっぱい叩いたの？あの先生。
隣の席に座っている沙里南は、黒板を見てノートをとっている。
くそう。コイツのおかげで俺はこの小さい背中には大きすぎる跡を負ったんだ・・・
「なにか？」
いきなり沙里南が振り向いた。ぎゃ。君こそなにさその笑顔。
「君もずるがしこいのね」
「あんたも『ココ』使いなさいよね」
沙里南は頭をトントンと指でつつく仕草をした・・・ってウザ！
「こらぁ～うるさいぞぉ～そこ」
何で俺だけ？っていうか先生なんでそんなゆっくりした動作であんな素早いチョーク投げれるんですか？　と思ってる間に俺の顔はチョークの粉まみれになっていた。
「んふぱふっ」
あわてて学ランで拭く・・って学ラン黒じゃん・・・取れなくなったし・・・
「ほらぁ！」
「あたしに言わないでよ！」
シャーペンで刺すな！地味に痛いわよ！　そうこうしているうちに２時間目も終わってしまった。

「大地～連れション行くぞ」
「合点承知のすけ！」
古いよ！いつのネタだよ！　だけどあえて突っ込まなかった。なんでも突っ込んでやるほど俺は懐の広い男じゃない。大地がなんとも寂しそうな顔をしてついてきたけど無視した。
便所に入って、男仲良く連れションしていると、
「うらやましいなあ、お前」
「は？何が」
大地がチャックを閉めて俺の肩に触れてきた。って汚いわよ！
「汚いわよ！」
「福田と仲良いじゃん。あいつカワイイしなあ」
無視しやがって・・・っていうか、沙里南と俺が？
「カワイイって・・・うぅん。」
語尾を濁らせてみた。そんなきっぱり否定出来るほどじゃないんだけど・・
「俺も好きなやつがいないわけじゃないよ？誰ってか？」
いや、聞いてねえよ？
「島谷　優(ゆう)なんだけど」
「は？大地が島谷を？」
・・意外だなあ。話してんのあんま見たこと無いんだけど。
「いいんじゃないの？苗字一緒だしいろいろ手間かからんのじゃないのじゃかね」
日本語おかしいって？しらんよ。
「いや、話し飛びすぎでしょ。。。っつーかお前チャック全開」
おぉおおお。危ねえ。俺は手を洗って便所を出た。
「ふーん。まぁ、いいんじゃねえの？島谷で」
「おーい。声が多少大きいかなあ佐伯くん？」
うざい！何キャラだお前
「お前から言い出したんだから、１０人くらいにばれる事ぐらいは覚悟してもらわないと」

「なんでそんなことサラっというんだお前は！」
あ、チャイム鳴った。大地はスルーで教室戻らないと。次はがっかつだ。

「えー今日は席替えをしたいと思います」
「やったーー！！！」
担任の槙先生の言葉で教室は一気に盛り上がった。
ん？席替えと言うことは・・・沙里南の隣の席から脱出できるチャンス！
「別に沙里南の隣がいやなわけじゃないんだけど、変な疑惑が立てられるのがコレまでいやだったんだよなあ・・・」
「そうなんだよなあ・・・って　は？」
俺の耳元で喋っていたのは荒谷だった。
「図星？」
そんな嬉しそうな顔でいうことでもないと思うけど・・・
いや、ここで動揺を見せたら負けるような気がする。
「まぁ、　で？」
荒谷がそれ以上頬は上がらないだろうと言う顔でニンマリした。ちょ、やめなさい女の子なんだから！　と思っていたら荒谷がサッとポケットから鏡を取り出して、俺の顔の前に突きつけた。
「自分の顔を見てみなさぁ～い？」
うっわ！！自分でも驚くほど動揺丸出しジャン！だめジャン！
「なんでお前はそこまで準備が良いんだッ！」
「あ、その顔面白い。写メとっちゃお」
ヤメテよ！　っつーか今授業中でしょ！槙先生！って目をそらすな！
「やめなよ。恵理子」
予想外のことに沙里南が助け舟を出してくれた。
「はぁ～い。」
荒谷がニヤニヤ顔のまま携帯をおろした。
・・・そういえば

案外遠い大地の席を見てみた。どうやらあっちはこっちの方をずっと見ていたらしい。寂しい顔をしている。
席替えって事は、アイツにもチャンスはあるよな・・・　そう思って、島谷のほうを見てみた。（あ、優の方ね。めんどくさいけど）
流行の最先端を知っていないと満足できないらしく、いつも学校で雑誌を読んでいる。昼休みは島谷の席に2～3人の特定の女子があつまって、楽しそうに談話している。って俺はストーカーか。ショートカットで内側に丸まっている髪は、いかにも大地好み。　だけど・・・
「背が、高いんだよなあ・・・」
やば、声に出ちゃった。みんなに聞こえてないみたいね。よかった
島谷はこのクラスの女子の中で一番背が高い。大地がチビっていうわけじゃないけど、標準身長だとどうしても島谷のほうが背が高い。普通女子って、自分より背が低い男子とは付き合いたくないよなあ・・・
っと、こんな長文を考えてるうちにクジ引き方式って決まったみたいだ。
「名簿順に引いてけよー」
俺は男子の名簿最後。と言ってもみんな次々と引いてくるからあっという間に俺の番になった。
「次、間宮～」
俺は教卓の前のコンビニ袋に手を突っ込んだ。よし。ココは運命を感じたこの紙切れだ！
「よっしゃあああああああああ！」
俺は勢いよくコンビニ袋の中から紙切れを引き抜いた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2465f/

幸せの草

2010年10月25日23時55分発行